

大塩事件研究会と私―読む会資料「竹園日記」に
抱いた興味―
井上宏

私が本会に入会したのは平成一九年、まだ浅いが、主題である研究会と私の関わりについて既に六二号等に拙文を寄せた。そこで今回は、「大塩の乱関係資料を読む部会」で提供された資料に興味をそそられたことに触れる。

読む会は終了後の酒席が談論風発、誠に愉快だが、長谷川伸三先生指導による古文書や関係資料の勉強には興味が尽きない。私は、現在そこで読んでいる、大和高田の僧侶の筆になる「竹園日記」のある記述が気になった。天保八年盆前、「大坂町々モ甚タサミシクテ、番所ヨリ色町へ遊女ニネリ物イタセトノ仰ニテネリモノアリ、(中略)大坂惣役者躍リヲ始メル、盆ヨリ永々ノ間ナルヨシ、千両役者ノコラズ出ル、五十人余、遊女町大不景氣」とある。当時大飢饉の中、また大塩平八郎の乱後間もない頃、幕府と言えは奢侈禁止令という頭があった私は驚いた。贅沢好きの家斉の治世とはいえ、老中首座は天保の改革で有名な水野忠邦である。この奉行所のお達しは本当にあったのかを調べてみた。その結果、ずばり「ネ

リ物イタセ」との記述は見つからなかったが、大阪市史第四下に、天保八年の口達として「六月朔日、町入用取締方申付候へ共、神事ハ別格之儀ニ付、例年之通相賑候儀、差構候事ニハ無之候事」とある。幕府は以前から、神事を賑やかにするようにとの触れを出し、庶民の不満のガス抜きを図っていたようで、竹園日記のそれは、大坂的拡大路線だったかも知れない。また、「儉約は尤もながら、時節柄を憚つて、必要な普請まで控えると、金銀融通も手狭になり、日雇い働きの者の稼ぎも無くなるので、町家・寺社とも普請砂持など遠慮無く行うように」との口達もある。幕府は、その頃はまた、儉約令一辺倒ではなく、意外にきめ細かく、経済が分かった施策も打っていたようだ。さらに、私が注目するのは、普請を勧める町触が老中大久保忠真の命で出たらしいことだ。大久保忠真は小田原藩主で、大坂城代も勤めたが、二宮尊徳を登用して藩政改革を推し進めた人だ。その彼が天保八年に急死したことと、その後水野忠邦が過激な天保改革で失敗したことと、何か関係があるのだろうか。読む会での勉強は、私の想像をいろいろ膨らませてくれる。